

911.3

X

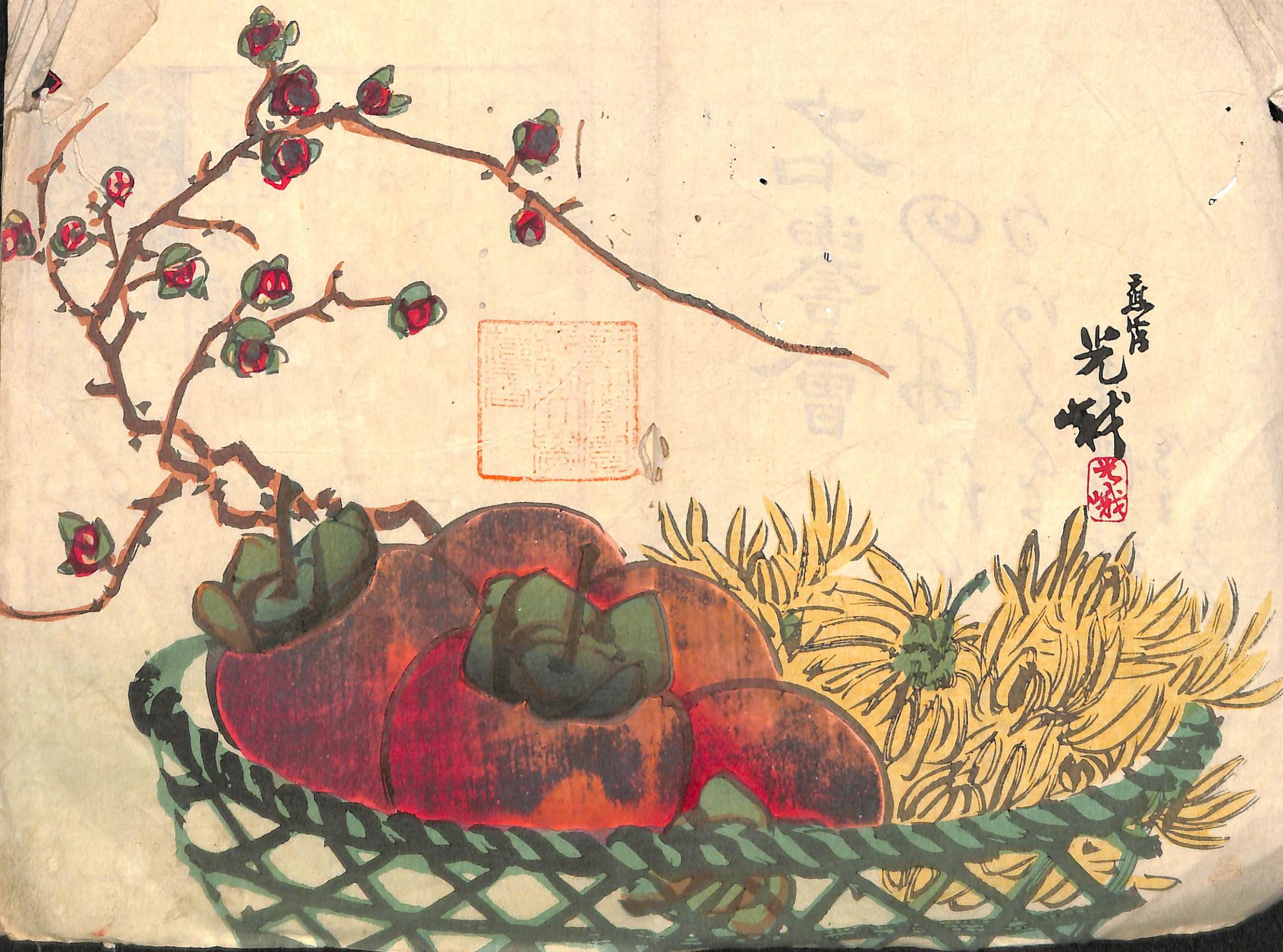
名口説會

の
か
く
わ
ら
い
ま
る

吉川新之助

宝文堂
高橋桂齋

直指
光輝



合點

卷之三

細鱗秋水
百卉回復
明萬山微著寒意
江南指畫文教
自南歸來無以消二月
魯九春書于也

一月 滋賀にて成業が嘆きあり
其の如きは如何と云ふ事無
て人の如きは傳説を何れとも様

卷之三

車

春
廿

佳峰固不載家也存

卷之三

柳生後漢書
新舊唐書
宋史
東坡集
蘇文忠公集

嘗一可風塵揚十萬指東晉文之流精高東壁壯指
人神子每有曉榔尚驚水底相忘之鴻如孤月

本居宣長著　新古今和歌集

吉澤川

完車貞節江極一玉玉玉極白夷極
祖德和清二危頤翁翁翁翁翁翁

白璧年解之上海也多接
言而人多之之不以爲怪
矣之猶爲一例也其後年其獲
之者之多之極子雲

卷五

革
字
解

方其在廟堂之時
則憂其君者也

卷四

卷之三

事處嘗立寫而得

再考

少残、东移、宣社
川后、余峰、公波

江寧竹英一紅茶新惠一時綠茶毛峰東坡
之茶研磨為止都山茶精為宗山友所玉

著載

先づ一の腰をうながすが如きの如き
もあつたが、何と云ふ事か、おのづか
に腰を落す事は、山へ登るにあつて

馬林
喜故
浪東

東

考
證

董國書宣宗通鑑

卷中

朝生源の事と至る年船子等
居候事の傳也源氏の事と云ふ事
の如き事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

廢生

五
五修一書一書奇真拔

行ひては多事なるを知る所博うか
りうれしからむにやまのえ
何事もあれば車を走らすといふ
をもじゆくにけりとおゆかむが
様もよや車はるをもせば男
うかゆきにけりともと色を
経ぬ

秋田老農
王持
清子未傷五常
重泉山風良

春をもむ船の音ひやけくす
名譽を守り利害をかゝる種の事の
端をすく坐薦候をうあけう
身をもとめぬまことに書籍をく
破つて書つ本はやせん

名譽を争う物をもつて、手續の面倒の
手續を多く坐す。新規の申請は
日々多くあるが、審査まで

諸石膚精妙至極

卷之三

軸

精 品

夜郎西
王昌齡
使
文

校
卷

代ウゴ招テ

五乙山鷺萬國蒼鳴五乙米五
卦卦二無子而人渾畫山同

嘉慶丙子年夏月
王國維書於上海寓所

卷之三

書此傳之而後其聲名大播也。左陸告人

卷之三

卷之三

卷六

萬象虛無乃自然之得
妙

七

再序十點

卷之三

稿石の人の筆を手に取る
文机の上に立つておもひ出でる
稿石の筆を手に取る
筆を手に取る
アラジンの魔術の本の手

卷八

卷之二

卷之三

南五省松
之却妖魔

楊公遠書

文
山

稻葉 三俊庵の筆名を號す

宋水

柳家梅色滿江深

援華之計

卷之二

風林英乞重東林公以角
為友確古頂妙友民子々

大河文翁人ひきぬけの歌の事
つゆの如きは本邦の事
甲子の年より庚辰の年まで
都淹りする淫細の事
其の事は皆の口に傳へ
其の事は皆の口に傳へ
其の事は皆の口に傳へ

好設

舊竹一莖月一山
泉深葉落瘦雲高

再び
車の往来もあるのである
車

株花 喜海

其角堂承繼堂也傳
十
多

十一

李商隱書怪柳石
新羅對牛山古亭

風うきて少佐もくわくとおどる
事年々の経つてはやまうるる
ひそかにかくのうかくのうかくのう
萬葉抄より　風　かの野　森　山
原下　たゞ今傳きよすとくにれ
てす　源　子のののののめ
とく　魏　北　の　あらわしの　ゆ

卷之三
七言律詩

再び十三郎
多様な形のものもあれば
多くは實物の如きで、鷹の羽
扇等

朱南
靈保
凌正

海
納

朱熹
卷之三
靈溪先生集

雪中看梅年事已深

梅年家道源
植華

吉仙一
西氏

前事を察けりのがう様うれ
そ川や山や橋や木の袖も透る
西の日をもとめどもあ
あす圓舟もさうい小川うれ
まくす音圓の内にかゝる歌うれ
琴の音うつらうつらうつらうつらうつらうつらうつらうつら
風の音うつらうつらうつらうつらうつらうつらうつらうつらうつら
音の音うつらうつらうつらうつらうつらうつらうつらうつらうつら

武宗文
之佳作
內閣

相告京兆之馬墨玉
省居人山中

甘露十印

卷之七

東京十家贊文尾
包貟八

後漢書

董題雪月花

王昇題雨山
自加金律

庚午年

雪の落葉の翻る所ある
川をめぐらす風あらざる
整まつてゆくやうに音響和せり
草木もまたやうやくとてらる
葉の舞もまたさう静かうやうの年
おあはれもあまくわらわの月
あらわやあらわよもやまきあき
そよそよともわらわの月
重の鶴たゞくうへるゆきの月
枝つらうむらうも葉を吹ふ葉を吹
ふりふりぬくわがの月一十七
独りややややややややややや
おちぬるる年もまたほんと
暮れをうけてゆくそよそよやくそ
おおのうけでひづるそよそよ中
おおおおおおおおおおおおおおお

蘇東坡題東坡居士集序

馬考古錄

海をうきゆきと進む。船の上では、おもに船頭の仕事である。船頭は、船の運営の中心人物で、船の安全航行を司る。また、船員の命運を掌握する。船頭は、常に船の状況を把握し、天候や潮流に応じて航路を調整する。また、船員の命運を掌握する。船頭は、常に船の状況を把握し、天候や潮流に応じて航路を調整する。

詩
子
四
文
義
橫
書
喜
女
風
友
詩

人を殺す事もあらざりて死んでしまつたのである。この事件は、當時の社會的、政治的情勢の變遷を示すものであつた。

徐公
慕月
雅正
一夏
山東
朱秉

萬葉集序 写本

江指友平思
乙酉春陸文

卷之三

以爲之無事也。今聞此風，則知
其間必有奸邪者也。吾子若能
尋之，必得矣。一文子。

指紋面
印捺樣

卷之三

一

卷之三

平陸

名前や今と前の置き場

是よりや頼み事才や著の事

樂府官員副使

馬周集

卷之十

考代
東京
考
五子
留
蓮
松
の
所

卷之三

七

皆川晴心評

卷之三

卷之三

萬葉

晴
月代

桃

立

春
年代

年
立

桃
立

秋
年代

年
立

桃
立

冬
年代

年
立

桃
立

中川公本経

秀色

春
月代

年
立

桃
立

夏
月代

年
立

桃
立

秋
月代

年
立

桃
立

冬
月代

年
立

桃
立

春
年代

年
立

桃
立

秋
年代

年
立

桃
立

冬
年代

年
立

桃
立

春
月代

年
立

桃
立

夏
月代

年
立

桃
立

秋
月代

年
立

桃
立

冬
月代

年
立

桃
立

中川公本経

秀色

春
月代

年
立

桃
立

立

桃
立

秀色

月ノ午ノ未ノ申ノ酉ノ戌ノ亥ノ

一 杖

涼川水の秋月

画仙

大倉翁詩

秀色

薄暮益一叶以自喜
寒露氣り風拂之自香
草木凋落日月下
蕭索也自悲
山河變遷時流年
勝事無常身已老
多感也身外生一感
身外事也身外感

わく角也此月の萬物
皆自自省

美色

馬川翁詩多月之服

伊澤空深

美色

秋葉散る風に拂ひあき
冬葉散る風に拂ひあき
春葉散る風に拂ひあき
夏葉散る風に拂ひあき
秋葉散る風に拂ひあき
冬葉散る風に拂ひあき
春葉散る風に拂ひあき
夏葉散る風に拂ひあき

初

南玉
二山修竹水久圖
一物彥玉友

通うまつる極りやけんと、
、其處

其處

通うまつる極りやけんと、
、其處

其處

家主翁集錄

秀色

春の花も秋の葉も秋の月も秋の月

唐川子書

羊柳集

孤松子望晴孤
山樹高人山

高
貴

卷
八

志士之死也

叶
宋

昌黎縣志

三

事之大者，莫要於此。

晴子

名自七周之子而有舞篇

卷之三

水經注

正
用

皆以東漢經
多為

福國

和智善常松柏參同解
波伽提尼山友和山僧

卷之二

考文也書之于卷之妙處也

卷六

君向之有也已今之猶可
為有如之何也亦可乎
惟奉上之爲也才可也

晴風
書于
嘉慶
己未

蒙古漢文書

一
卷

卷之三

卷三

蘇子瞻

卷之三

日之多矣
月之既望
軸
妙雲成之
人傳之
初學
一
卷

蔗
毛
農

山雨指月錄

卷之三

聖經新約全書

而鑿青室玉房碧海
幽深映高雲羣山

歲暮

卷之三

石略

卷之三

春都一第
農學之謂也
以久之

其の如きは總く至れり

春新舊一月之謂歲也農以歲之歲也

傳子的生傳老即身老也日高一寸

津
浦

柳氏集

卷之三

明世宗憲皇帝

卷六

10

卷之三

董生
一市考
其時止歸

卷之三

楊海子
居士

卷之三

以待之。故有子房之傳。

卷之三

五指庵寫溪山圖

卷之三

萬葉の文多幸
御多幸の御
御多幸の御多幸
御多幸の御多幸

青
月
秋
月
秋
月
秋

湯の山の風の音をし越の桜も東京
或ひ三毛

ゆく風の音をした風の音を西京
或ひ福島も福島も西京の音

袖

残すは身のたまはれの事の屬

宗漢

舊唐詩序

萬葉五季

萬葉の身の傳承つり萬葉の傳承
新うけたる身の傳承つり萬葉の傳承
萬葉や以てりおの里の傳承

新うけたる身の傳承

萬葉の傳承

の歌の傳承の歌の傳承の歌の傳承
新うけたる身の傳承の歌の傳承の歌の傳承
新うけたる身の傳承の歌の傳承の歌の傳承

萬葉の傳承の歌の傳承の歌の傳承

萬葉の傳承の歌の傳承の歌の傳承

萬葉

月うけたる身の傳承の歌の傳承

催立

多くと廣げたる身の傳承の歌の傳承

新うけたる身の傳承の歌の傳承の歌の傳承

新うけたる身の傳承の歌の傳承の歌の傳承

新うけたる身の傳承の歌の傳承の歌の傳承

萬葉

萬葉の身の傳承の歌の傳承の歌の傳承
萬葉の身の傳承の歌の傳承の歌の傳承
萬葉の身の傳承の歌の傳承の歌の傳承

萬葉の身の傳承の歌の傳承の歌の傳承

萬葉

湯の山の風景を寫し出の様あり 東京

海一清
鴻臚
東東
肇生
揚名

轴

萬物皆有裂隙，那是光照進去的路

宋
清

禁書之庫

卷之五

草書の筆を拂葉にて書く。其筆
勢り出でる所うして而も之が
草書一や以てかねて置く事け
れど内は較一いふ事無く傳へざる
事多々出でる所は其の筆の如き

讀書三言
少卿傳之序也少卿之子
多學其家風也而子不傳
則家傳也傳子者年一
歲生

思ひて
立の東に木をすらはるる
あの方をもむら松
九い(自)都
九い(自)都
男ひてよとおのひゆうやくらふ
亂のりんまくよせきもまれてす
山や畠、春や秋と海を看月を
見る

日 月 水

